



現代インド・フォーラム



Contemporary India Forum Quarterly Review

2013年 夏季号 No.18

マンモハン・シン・インド首相の訪日と日印首脳会談
Visit of Indian Prime Minister Dr. Manmohan Singh and
the Summit Meeting with Japanese Prime Minister Mr. Abe

松田 誠 (外務省南部アジア部)

Reflections on Japan
私の日本考

Vikas Swarup (Consul General of India)

日印交流にこそ質を!

Quality; that's exactly what Japan-India relations need

堀内 伸二 (公益財団法人中村元東方研究所)



公益財団法人 日印協会

THE JAPAN-INDIA ASSOCIATION

<http://www.japan-india.com/>

電子版

- ※ 本誌掲載の論文・記事の著作権は、公益財団法人日印協会が所有します。
- ※ 無断転載は禁止します。(引用の際は、必ず出所を明記してください)
- ※ 人名・地名等の固有名詞は、原則として現地の発音で表記しています。
- ※ 政党名等の日本語訳は、筆者が使用しているものをそのまま掲載しています。
- ※ 各論文は、執筆者個人の見解であり、文責は執筆者にあります。
- ※ ご意見・ご感想等は、公益財団法人日印協会宛にメールでお送りください。

E-mail: partner@japan-india.com

件名「現代インド・フォーラムについて」と、明記願います。

現代インド・フォーラム 第18号 2013年夏季号

発行人兼編集人 平林 博

発行所 公益財団法人日印協会

〒103-0025

東京都中央区日本橋茅場町2-1-14

TEL: 03(5640)7604 FAX: 03(5640)1576

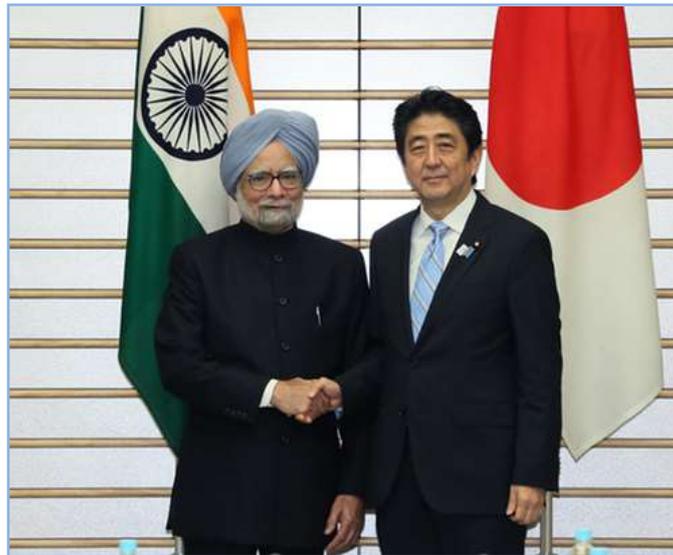
弊協会は、本年で創設以来110年目をむかえました。平素のご支援に感謝致しますと共に、今後ともご指導・ご鞭撻の程、お願い申し上げます。

代表理事・理事長 平林 博

マンモハン・シン・インド首相の訪日と日印首脳会談

Visit of Indian Prime Minister Dr. Manmohan Singh and
the Summit Meeting with Japanese Prime Minister Mr. Abe

外務省 南部アジア部 南西アジア課 課長
松田 誠



<写真提供：内閣広報室>

はじめに

5月29日、安倍総理は、訪日中のマンモハン・シン・インド首相との間で首脳会談を行った。今回の会談は、両首脳の間で行われる三度目の首脳会談であったが、幅広い分野で大きな成果を達成するものになった。周知の通り日印関係は、近年、著しく拡大・深化してきている。その要因として指摘し得る点は、経済成長を背景とするインドの国力増大、巨大な人口と高い潜在性を有する市場、インドの外交政策における東方重視の姿勢等、多様である。また、発展する日印関係を支えている主体も、両国政府及びその関連機関だけではなく、両国の民間企業や大学などの教育機関、更には、様々な交流団体などであり、これもまた、実に多様である。ただし、日印関係について特筆すべきことは、2005年以降、ほぼ毎年、首脳が相互訪問して首脳会談を行ってきたことである。この年次首脳会談の枠組みは、両国関係の全体像を鳥瞰した上で、更なる関係進化のために必要となることを洗い出し、これらを進めるに必要な政治的な意思を結実させるという役割を果たしてきた。その意味において、日印年次首脳会談は、拡大し発展する両国の協力関係の原動力となってきたと言えるであろう。

本稿では、今回のシン首相訪日の概要につき、日印首脳会談の成果を中心として紹介

するとともに、次回の首脳会談に向けた当面の課題について述べたい。なお、本稿中、意見にわたる部分は、筆者の個人的な見解であって、日本政府又は外務省としての立場を述べたものではないことを予め申し上げておきたい。

I. 訪問の背景

1. 冒頭、触れたとおり、日印間では 2005 年以来、毎年首脳が相互訪問を行い、首脳会談を行ってきた。前回の年次首脳会談は、2011 年 12 月末に野田総理(当時)がインドを訪問された際にシン首相との間で行ったものであった。2012 年の首脳会談については、当初、同年 11 月 16 日に東京で行われる予定であったが、丁度その日に衆議院が解散されることが 2 日前に決定され、シン首相の訪日は一旦とりやめとなった。

2. その後、日本においては安倍内閣が成立した。安倍総理は、かねてから日印関係の重要性を様々な機会に強調されていた。2006 年、安倍総理とシン首相との間で行われた首脳会談では、日印関係は「戦略的グローバル・パートナーシップ」であると再定義され、政治安全保障分野と経済分野の双方において、関係を一層発展させていくという政治的意思が確認された。また、翌 2007 年、インドを訪問された安倍総理は、インド国会において、「2 つの海の交わり (Confluence of Two Seas)」という標題で演説を行い、日印関係は世界で最も可能性を秘めた二国間関係であること、強い日本はインドの利益であり、強いインドは日本の利益であること、そして、日印間のパートナーシップは、自由と民主主義、基本的人権の尊重といった基本的価値と、戦略的利益とを共有する結合であることを表明された。この演説は、その場におられたインドの国会議員の方々のみならず、多くの関係者の心をとらえ、その記憶に刻まれているものである。

3. 安倍内閣が発足した昨年 12 月末、安倍総理はシン首相との間で電話会談を行い、両国関係の重要性を再確認するとともに、双方の都合がよい時期にシン首相が訪日して首脳会談を行うことで一致した。その後、両国の外交当局間でシン首相の訪日日程につき再度、調整を行い、訪日期間を 5 月 27 日から 30 日とすること、日印首脳会談を 29 日に行うことが決定したのである。

II. シン首相の訪日日程(概要)

1. 今回、シン首相は、コール夫人とともに日本政府の公式実務訪問賓客として 5 月 27 日から 30 日まで訪日した。主たる公式行事は 29 日に行われ、同日午前、天皇皇后両陛下の御引見、また、同日夕刻に安倍総理との間で日インド首脳会談が行われた。その後、両首脳は、共同声明(骨子別添)への署名を行い、また、両首脳立ち会いの下、八木駐インド大使とワドゥワ駐日インド大使は、円借款案件「ムンバイメトロ三号線建設計画」(710 億円)の交換公文の署名を行った。更に、日印ビジネス・リーダーズ・フォーラム

(BLF)2013 の共同議長である米倉経団連会長とカルヤニ・バーラト・フォージ会長から同フォーラムの報告書が提出された。これらに続き、日印政財界要人、有識者等約 80 名を招いて安倍総理夫妻主催晩餐会が開催された。



<写真提供：内閣広報室>

2. この前日の 5 月 28 日、シン首相は、日印協会(森喜朗会長)、日印友好議員連盟(町村信孝会長)、民間外交推進協会(FEC、金川千尋会長)の三者共催で行われた講演会に出席し、日印関係の歩みと展望を鳥瞰するスピーチを行った。その中でシン首相は、「私が最初にこの美しい国を訪問した 1971 年以来、日本は私の心に深く刻まれていることを申し上げたい。両国関係が進展し繁栄することは私の夢であり、インドの首相としてこの 9 年間努力してきた目標でもある。今日、日印関係が堅固な関係に転換したことに励まされる」と述べた。近年の日印関係の深化・拡大は、シン首相のリーダーシップの賜物であると言っても過言ではない。シン首相のこの言葉は、如何に彼が日印関係を重視してきたかを率直かつ雄弁に表すものであろう。なお、過去の首脳会談等を通じて、安倍総理とシン首相の間には、個人的な信頼と友誼の関係が構築されており、28 日夜には、翌日の首脳会談及び公式晩餐会を前に、安倍総理ご夫妻は、シン首相ご夫妻を招待してプライベートな夕食を主催された。

3. また、日本滞在中、シン首相は、岸田文雄外務大臣(29 日午後)、茂木敏充経済産業大臣(29 日午後)、山口那津男公明党代表(28 日午前)、海江田万里民主党代表(29 日午前)による表敬を受けた。

Ⅲ. 日印首脳会談の概要及び評価

1. 首脳会談の成果とその位置づけ

(1) 先に触れたとおり、今回の日印首脳会談は、安倍総理とシン首相との間で行われた三度目の首脳会談であり、2006 年に両者の間で構築に合意された「日インド戦略的グロー

バル・パートナーシップ」の発展を改めて確認するものとなった。インドは、自由、民主主義、基本的人権、法の支配といった基本的価値を共有する南アジアの大国であり、近年、国際社会における存在感を顕著に増大させつつある。日印両国は、相互の関係をお互いの利益に沿った形で発展させていくのみならず、アジア地域及び国際社会の平和及び安全の維持、経済的な繁栄に資する形で協力を行っていく責務がある。日印間の戦略的グローバル・パートナーシップは、このような認識に基づくものであり、今回の首脳会談でも、幅広い分野について議論が行われた。

(2) 各論については後述するが、今回の首脳会談では、多くの具体的な成果を得て、大きな成功を取めたと言えよう。一例を挙げれば、政治安全保障の分野では、二国間海上共同訓練を定期的に頻度を上げて実施していくこと、また、日印原子力協定に関し、早期妥結に向け交渉を加速化させること、経済分野では、インドにおける高速鉄道に関し両国が共同で調査を実施すること等について一致した。これらはいずれも中身の濃い実質を伴う協力案件であり、日印関係がここまで成熟し深化していることを端的に示すものである。

(3) 日印間の協力は、既にレトリックの段階を超え、実体的な協力を推進する段階にある。これらを実際に進めていく上では、心地よい響きの麗句を交わすだけではなく、様々な具体的な問題を実際に解決していくための現実的な努力が必要となる。今回の首脳会談では、このようなプロセスで必要となる両国の政治的意思が改めて確認された。換言すれば、今回の首脳会談の成果は、何かが出来上がったことを宣言したことではない。むしろ、今後の努力の方向性を明らかにし、両国の関係当局が具体的な作業を立ち上げ、また、継続していくために必要となる政治的意思を明確にしたことがその成果であったと思われる。その意味で、より重要なのは今後のフォローアップであるとも言える。



<写真提供：内閣広報室>

2. 首脳会談の具体的成果

(1) 天皇皇后両陛下のインド御訪問

両陛下のインド御訪問については、本年4月、菅義偉官房長官が記者会見において、昨年に日印国交樹立60周年を迎えたことも踏まえ、できれば年内にも両陛下のインド御訪問を実現する方向で調整を行うことが発表された。今回の首脳会談では、11月末から12月初め頃に、両陛下に国賓としてインドを御訪問頂けるよう調整していくことで一致した。両陛下については、1960年、皇太子殿下及び同妃としてインドを御訪問された経緯があるが(その後、62年及び75年にインドにお立ち寄り)、本年の御訪問が実現すれば、天皇皇后両陛下としての初の御訪問となり、本年は日印両国にとって、まさに記念すべき歴史的な年となる。

(2) 政治安全保障分野における協力

政治安全保障分野においては、日印両国間で様々な対話と協力が行われている(外相間戦略対話、次官級外務・防衛協議いわゆる2+2、日米印3カ国協議、サイバー協議、海洋対話等)。これらの多くは、ここ2年くらいの間に開始されたものであり、政治安全保障の分野において、如何に両国間の対話と意思疎通が拡充しているかを示すものである。今回の首脳会談において両首脳は、これらの対話の進展を歓迎し、今後とも実施していくことで一致した。

また、海上自衛隊とインド海軍との間の二国間共同訓練について、今後、これを定期的かつ頻繁に実施することでも一致した。日印間では、2012年6月、海上自衛隊とインド海軍との第一回共同訓練が相模湾沖で実施された。今後、第二回共同訓練を早期に行うべく、両国間で調整を行っていくことになる。

更に、日本の救難飛行艇(US-2)をインド側が導入する可能性を模索するべく、両国間で合同作業部会(JWG)が設置されることとなった。近く、同作業部会の構成及び具体的な活動につき、両国間で調整を行う予定である。

この他、両首脳は、海上保安庁と沿岸警備隊との間で連携訓練が実施されてきていることを歓迎した。

(3) 民生用原子力分野における協力

日印間の民生用原子力分野における協力については、2010年、二国間の原子力協定交渉が開始され、2010年6月、9月及び11月の計3回の交渉が行われたものの、それ以降、正式な交渉は開催されていない。今回の首脳会談では、協定交渉の早期妥結に向け交渉を加速させていくことで一致をみた。今後、具体的なスケジュール等について調整を行い、交渉を進めていくことになる。

(4) 経済分野における協力

先に触れたとおり、今回の首脳会談後、円借款案件「ムンバイメトロ三号線建設計画」(710億円)の交換公文が署名された。また、安倍総理よりシン首相に対し、「インド工

科大学ハイデラバード校整備計画(フェーズ 2)」(177 億円)支援に係る意図表明が行われた。これらにつき、シン首相からは、日本の協力に対する謝辞が述べられた。近年インドは、日本の円借款の最大の受益国となっており、2012 年の対インド円借款供与総額は、3,000 億円を超えた。安倍総理が表明しているとおおり、強いインドは日本の利益である。日本としてはインドの経済開発を引き続き支援していく考えである。

インドの高速鉄道に関しては、シン首相から日本の新幹線システムについて高い評価が表明された。現在、インドにおける高速鉄道の候補路線として、7 路線があがっている。今回の首脳会談では、そのうち最も優先度が高いとされているムンバイ・アーメダバード路線について、日印で共同調査を実施していくことが決定された。日本の新幹線システムがインドに導入されれば、両国間の関係深化を示す象徴となる。巨大なプロジェクトであるため、実現に向けて解決すべき問題も多岐にわたる。本件調査の実施は、インドによる日本の新幹線採用に直接結びつくものではないが、日印共同で具体的な調査作業を行っていくことになったのは、一つの意味ある前進であると言えよう。

また、この他のインフラ案件として、両首脳は、デリー・ムンバイ間産業大動脈構想(DMIC)及びその中核である貨物専用鉄道建設計画(DFC)が着実に進展していることを歓迎し、更に、チェンナイ・バンガロール地域の開発について、包括的な統合マスタープラン策定作業が進展していることを歓迎した。インドの経済成長は、大都市地域における急速な近代化をもたらしているが、国土が広大であることもあり、これら大都市間の連結性が脆弱であることがインドの発展のボトルネックになっているという指摘は多い。大都市間を連結するインフラを整備することにより、インドの潜在性を開花させ、更なる成長に結びつくことが期待される。

この他、民間経済関係の更なる進展をはかるべく、安倍総理からシン首相に対し、ビジネス・マッチング等を通じ、インドへの投資拡大を後押ししたいと伝達するとともに、金融・税制や投資面の一層の規制緩和を期待する旨伝えた。インドに進出する日本企業数は、近年、毎年約 100 社のペースで増加しており、今や 1,000 社にとどこうとしている。同時に、両国の間には、まだまだ大きな潜在力があることは明らかである。ビジネス・マッチング等の取り組みは、日印双方にとっての利益となろう。また、日本からインドへの投資を促進するためには、インドにおけるビジネス環境の一層の整備、具体的には、金融・税制や投資面での規制緩和が引き続き重要であり、インド側に対する働きかけを継続していくことが必要である。

(5) 人的交流分野における協力

日印関係は、近年飛躍的に進展しているが、人的交流の分野、特に若者の交流については、まだまだ発展の余地がある。今回の首脳会談において、安倍総理からシン首相に対し、日本の青少年招聘事業(JENESYS2.0)により、インド人青少年約 1,200 名を

日本に招待したい旨伝達した。また、安倍総理からシン首相に対し、インド工科大学ハイデラバード校及びインド情報技術大学ジャバルプル校に係る協力を引き続き行っていくこと、更には、ナーランダ大学に関し、日本が平和研究等に貢献していく用意があることを伝達した。シン首相からは、日本が高等教育の分野において高い関心を有していることにつき謝意が表明された。

(6) 地域問題及び地球規模問題についての協力

今回の首脳会談においては、上記のような二国間の問題とともに、地域問題及び地球規模の問題についても議論された。例えば、両首脳は、国際法に基づく海洋における航行の自由等を再確認するとともに、東アジア首脳会議(EAS)に関し、ASEAN 海洋フォーラム拡大会合の開催等を歓迎した。この他、両首脳は、アフガニスタン、北朝鮮、テロ対策、気候変動、安保理改革等での協力も確認した。

IV. 当面の課題

1. 以上のとおり、今回の日印首脳会談では、幅広い分野について両首脳が率直な意見交換を行うとともに、具体的な協力案件を進めていくことが合意された。次の大きな節目は、安倍総理の訪印であるが、その時期については、今後、両国の外交ルートで調整を行っていくことになる。
2. それまでの間、両国の関係当局は、今回の首脳会談の結果を受け、個々の案件を前進させていくための努力を行っていくことになる。具体的に言えば、高速鉄道に関する共同調査の実施方法について早期に合意し、これを開始すること、原子力協定について、交渉を行っていくこと、救難飛行艇(US-2)に関する合同作業部会を早期に立ち上げること等である。他にも、デリー・ムンバイ間産業大動脈構想における具体的なプロジェクトを遅滞なく進めていくこと、2年前に発効した日印包括的経済連携協定の実施として、各般の経済協力措置を実施していくことなど、行うべきことは多い。
3. これらはいずれも決して容易な作業ではない。両国及び両国の国民にとって実質的な意義を有する協力であればあるほど、その実現のために解決すべき課題と問題は多くなる。今回の首脳会談を経て、2012年に国交樹立60周年を迎えた日インド関係は、新たな段階へと歩みを進めたと評価できよう。しかし、その真価が問われるのは今後のプロセスにおいてである。歩みを更に前に進めていくためには、両国の関係当事者が首脳会談の成果を着実にフォローアップし、具体的な進展を得ていくための努力を継続していく必要がある。

(2013年6月20日)

筆者紹介 松田 誠(まつだ・まこと)

1990 年外務省入省。

本省では、総合外交政策局安全保障政策課、条約局法規課、アジア局北東アジア課、大臣官房人事課等で勤務。

2003 年在米国大使館、2010 年在アフガニスタン大使館に赴任。

2012 年 8 月から現職。



Reflections on Japan

私の日本考

Vikas Swarup
Consulate General of India

(Extracted from an address given by Consul General Vikas Swarup to members of the Osaka Prefectural Government participating in *Osaka Fumin Juku* on May 23, 2013)

My talk today is titled ‘Reflections on Japan’. I must confess, at the very outset, that this is a difficult and complex topic. Because Japan is a complex and enigmatic nation. It is a culture of subtlety and contradictions, oppositions at once in conflict and harmony; city and mountain; castle and pachinko; skyscraper and waterfall; kimono and karaoke; neon and cherry-blossom; beauty and brokenness; speed and stillness; solitude and crowd; shadow and light; past and future.

When my wife Aparna and I and our two sons first arrived in Japan on the 5th of August 2009, we arrived after postings in Turkey, US, UK, Ethiopia and South Africa. We thought we had seen everything, done everything. Yes, we did have an image of Japan in our minds. We expected a technological wonderland of science and innovation. We expected bright lights, impressive skylines, superfast trains, sakura and Mount Fuji. What we did not expect was two hundred year old wooden houses, thousand year old festivals, hot and humid summers, and the most amazing people on this planet.

Of course there were quite a few culture shocks as well. First of all, I didn’t expect the Japanese to be so reluctant to speak in English. The day we arrived in Osaka, we spent half an hour in a supermarket just trying to make the shopkeeper understand we wanted salt. An Indian who also came on the same flight with us saw all these people in masks and asked me: “Why does Japan have so many doctors?” I took a lift down from the Consulate office on the tenth floor and was momentarily stumped to find that there was no ground floor.

Over the months and years, Japan continued to surprise me. Almost every week brought a new discovery of some ancient temple or lovely museum. But something else happened too. The things I once deemed exotic and strange became to appear common and normal. I melted into the fabric of everyday Japanese life. Japan began to feel like home, it *became* our home.

Unfortunately diplomats are global nomads and every three years or so we have to move.

So now, as we are preparing to leave the place we called home for so long, we are overwhelmed by memories and emotions. We now realize how much we will miss Japan. This country grows on you. Simply because Japan, like India, is unique.

India is unique because of its sheer diversity, its antiquity, its complexity, and sheer numbers. Japan is unique because of its homogeneity and its extraordinary culture. Possibly nothing has been more influential in bringing about this uniqueness than the period of over two hundred years of national seclusion that Japan entered during the 17th century. During this time, the Japanese were forbidden on pain of death to travel abroad or engage in trade with foreign countries and foreigners were also not allowed to enter Japan. This gave Japanese culture the opportunity to develop independently of foreign influences, leading to a truly unique culture.

We have experienced this fascinating culture everywhere, whether in spotting geishas in Kyoto's Gion district or Obachans in Tenjinbashi; catching a sumo tournament in Osaka or interacting with a ninja, visiting a wonderful museum or climbing up a castle; admiring a wood block print or browsing through Manga; enjoying sushi or sampling fine sake, witnessing a Noh performance or marveling at a Kabuki spectacle.

I believe a society is defined by the values which underpin its culture. And Japan has a very cohesive society with strong values and ethics.

I read a comment by a Japanese professor saying that while Westerners are digital, the Japanese are analogue. Whereas Western people are individuals who have intrinsic merit of their own and who do not feel the need to define themselves in terms of other people, Japanese can only operate as part of a larger system, like one hand on the face of an analogue clock, only of value when in a relationship with somebody or something else.

This is what accounts for Japan being one of the safest places on earth. In my last posting I slept with eight locks, two grills, and sensor beams and alarms all around the house. Here, quite often, we go out for a stroll with the front door unlocked. I see women riding their bikes in the middle of the night. Toddlers are left in unlocked cars while their moms duck into stores. Five-year-olds walk home from school unsupervised and alone, crossing four-lane roads when the crosswalk light turns green. Safety is paramount. So much so that even the deer in Todaiji have learnt to bow!

But what really amazes me, though, is that even if you misplace your wallet on a train or a bus, you have a very good chance of getting it back. Many of my Japanese friends ask me why don't I write a novel about Japan. I tell them that all my novels involve some kind of transference. Somebody's briefcase full of cash gets in the hands of someone else; somebody's diamond ring falls into the hands of someone else. That is what moves my plot forward. But in Japan, even if I deliberately drop my wallet on the road, someone will pick it up and run after me to return it. So how will my story move?

My wife Aparna misplaced her cellphone in the Unzen National Park. We tried to search for it and did not find it. But two hours later we got a call from the police and a policeman personally came to our hotel to return the cellphone which a Japanese tourist had deposited with the nearest koban.

That is why the most amazing thing about Japan is its people. The people I have met here are some of the nicest, most genuine people I have ever met in my life. Their kindness and manners are forever imprinted on our hearts. If you ask a passing stranger if they know where a particular shop is and if they don't immediately know the answer, they'll often start researching the subject on your behalf, whipping out their smartphones to locate it using Google maps or calling up their friends for advice. And after peering at maps and placing phone calls, they'll personally escort you to the place, even if it happens to be half a kilometer away!

In a way the entire basis of Japanese culture is to make the other feel comfortable. I am told that preserving or maintaining the 'Wa', which means 'harmony', is of the utmost importance in Japan. For this reason, being loud, and disturbing others around you, is frowned upon. No one blows car horns in a traffic jam. No one writes graffiti on the walls. No one litters the streets. Everyone respects other people and just minds their own business. This is why people are always so quiet on trains, so peacefully patiently waiting in lines, so polite whenever you enter their store, and so punctual in arriving in time for meetings and parties. In the rest of the world, punctuality is defined as "the art of waiting for others who are unpunctual"! In Japan, it is sacred.

Another thing that has struck me about Japan is the lack of public fighting. In fact, it is extremely rare to hear a Japanese even criticizing another person publicly, let alone pushing or hitting someone.

I think that the respect shown by Japanese, young and old, to the environment they live in and the people around them is a beautiful thing and is partly what makes Japan so great.

No matter where, when, or how we dealt with Japanese people in our daily life, they always showed us their best side, to ensure that we feel comfortable and have a pleasant interaction.

That is why Japan excels in customer service. The little exchanges – the warm, moist serviettes before a meal, the complementary cups of tea, the warm smiles you receive upon entering a shop, the refusal to accept a tip. These little details are very much the norm in Japan because this is a detail oriented country. They insist on doing things properly and precisely. There are rules for everything. How to cut that perfect slice of sashimi. How to make that perfect bowl of tea. How to place that twig in an ikebana flower arrangement. How to make that perfect stroke in a sumi-e painting. Many Japanese wrapping techniques are as intricate as origami, making the wrapping almost as important as the gift itself.

In fact gift-giving is a natural part of Japanese culture. One of the first visitors I received on arriving in Osaka was the police Inspector of the local ward. Now in most countries if an inspector comes to visit, he will only bring handcuffs. But this Japanese inspector brought me a gift, a delicious pack of grapes. I believe generosity is an ingrained and essential component of the cultural being of the Japanese.

Another thing I'm fascinated with is the Japanese love for tradition and ceremony. And living like a local over an extended period of time has enabled us to experience all the traditional events and activities associated with different times of the year. There is a time for viewing cherry-blossoms, a time to go swimming in the sea, a time for looking at the harvest moon, a time for throwing beans to keep demons away, and a time for placing little piles of salt outside your home (also, to keep demons away). There is a day to celebrate your boy children, one for your girl children, and one for the elderly. And then there are the matsuris. There is also no shortage of festivities in Japan. Japanese people love gatherings and celebrations. We have seen so many matsuris, from the Snow Festival in Sapporo to the Gion festival in Kyoto to the Tenjin Matsuri in Osaka. And we especially enjoy the hanabi in summer, in particular the spectacular fireworks.

If tradition is seamlessly integrated into the daily life of the people, then so is religion, just like in India. Even in the busiest street or in the middle of a rural backwater, you will find

a temple or a shrine. Kyoto alone has 1600 temples and 400 shrines which are oases of peace and tranquility. And whenever I've stopped by a local temple or shrine I have found someone pausing for a moment of prayer. It's a bit ironic that in hyper technological Japan with its fast paced lifestyle, people still find time to feed their souls.

From religion also springs the Japanese sense of beauty. As J. Stanley Baker said, for the Japanese, beauty is 'an inseparable part of life itself.' In India we say Satyam Shivam Sundaram. Truth is Beauty. In Japan they say, Beauty is Truth.

Japan has been blessed with abundant natural beauty. What we have enjoyed the most in our stay has been the opportunity to see some of the natural wonders of Japan from amazing volcanoes to gorgeous lakes, gorges, waterfalls, beaches, hot springs and even sand dunes (like in Tottori) and whirlpools (like in Naruto). We've also seen plenty of Japan's man made wonders, from the world's longest suspension bridge in Akashi, to the world's tallest tower (Sky Tree), to one of the world's fastest supercomputers ('K' installed at the RIKEN Advanced Institute for Computational Science campus in Kobe), biggest aquariums and ferris wheels.

We have especially enjoyed the four seasons in Japan, where spring means flowers and cherry blossom, a stunning display of soft shades and colour, autumn is a colourful contrast, painting hillsides in red, gold, bronze and yellow, winter is a time of snow and eating mikan oranges and summer is a time to hit the beaches.

The natural beauty of Japan is unsurpassed, from its luminous mountains to its tranquil country side. How can we ever forget the sight of the rose-coloured sun dipping into the horizon, the soft, white billowing clouds swaying across Mount Fuji, walking under the pink canopy of Cherry Blossoms on Philosopher's Path, the historic Torii gate at Miyajima rising out of a blue sea, or the magic of sitting in an outdoor hot spring bath overlooking mist covered hills.

The natural beauty of Japan is miniaturized and brought down to human scale in the formal garden. And we were fortunate to see quite a few from the Ritsurin in Takamatsu to Adachi and Yuushien in Matsue. And we've become complete fans of the Zen gardens of Japan, such as those at Ryoanji, Daitokuji, Tenryuji, Nanzenji and Tofukuji.

What is amazing about Japanese culture is that it has taken the natural beauty in the world around it to develop and perfect an inner beauty, a distinct sense of aesthetics. Today, scholars use terms like wabi sabi, mono no aware, and ma, to explain how Japanese

attitudes towards nature have influenced their art and culture. Each of these aesthetics depicts a different kind of beauty, often describing beauty found in unexpected forms. Wabi sabi represents rustic and desolate beauty, the worship of the imperfect, the natural, like Bizenyaki; mono no aware refers to a fleeting, varying beauty. The sakura or cherry blossom tree is the epitome of this conception of beauty; and ma to an empty or formless beauty, manifest in Japanese living architecture, garden design, music, flower arrangements (Ikebana) and poetry. By defining beauty through these aesthetics, Japan has generated an awareness of the beauty of nature not typically found in other societies, especially in sprawling urban settings. What is more, it has applied this aesthetic to all fields of culture: in arts like poetry and calligraphy; through rituals such as the ancient tea ceremony; and in contemporary urban life, consumer goods and architecture.

The Japanese look for the 'Beauty of the Moment' in everything, whether it is watching a sunrise or holding a cup of tea in the correct way, the stroke of a brush to paper, or a perfect cut of a blade. Even the humble bento box becomes a work of art. Compare that to the bland wrapping of a Burger King.

The sense of Japanese aesthetics is best seen in Japanese food, another reason why we love Japan. The Japanese treat good food with reverence and there is great excitement in Japan around seasonal foods. In the spring you will likely stop by a teahouse for some matcha and seasonal wagashi, in the summer you can't miss the abundance of unagi (eel) in restaurants, in the fall and winter you will be warmed by oden. Food in Japan is celebrated and treated as much more than a source of nourishment. There is a strong emphasis on invoking the sensual experience of eating not just in the way of taste, touch and smell, but also sight. The Japanese firmly believe that you eat with your eyes first. We especially admire the minimalist tradition of Japanese cuisine where less is usually more. Space on a clean, white dish can be as beautiful as the delectable portions of sashimi the chef doles out.

If Tokyo has the highest number of restaurants in the world, Japan also has the most vending machines per capita. These nifty machines sell everything - fresh eggs, flowers, live seafood, cigarettes, ties, hot food, hot drinks, batteries, toys, electronics, popcorn, fresh milk and juice, ice, beer, wine, spirits, sake, ice cream, fresh vegetables, sacks of rice, the list could go on and on.

And that is because technology is embedded in the Japanese lifestyle, from the first bullet trains in the world to cell phones whose screens double up as TVs, to the amazing toilets

with heated seat and array of buttons which do everything for you. Almost all modern buildings are completely earthquake proof. There are multistory robot-operated parking garages, touchscreen menus at many bars and restaurants, paperless check in at airports, instant translation via phone, home vacuum robots, and even square watermelons!

Japanese cities are also some of the most organized in the world. They are the cleanest cities I have ever seen, even though I hardly see a trashcan. They cater to all sections of society, from five star hotels to business hotels to capsule hotels. From luxury malls to the ubiquitous convenience stores and the 100 yen shops.

Public transportation in Japan is out of this world. Essentially, one can travel to just about anywhere in Japan using some form of public transportation that is quick, convenient, practical and always on time. The amazing postal and parcel service of Japan is another marvel, delivering just about anything to anywhere - all over Japan.

Another thing I've observed in Japan is a sense of contentment. In general, people don't flaunt their wealth and very few ask about other people's income. It's not that Japanese people are disgusted by wealth; it's just not a high priority for many people. We have a phrase in Hindi called *ninyanvey ka pher*, the Cycle of 99. When we have 99, we want to add one more to make it three digits. When we get to 999 we want to add one more to make it four digits and so on endlessly. In Japan, most people seem to be out of this rat race, living by a different value system.

Let me illustrate this with a true story. When I first moved into my new house in Kobe in 2009, I hosted a housewarming party. One of the guests was my deputy, Mr. Tripathi. He arrived at the JR Sumiyoshi station by train from Osaka and then got into a taxi. Unfortunately, the taxi driver did not understand English very well, so when Mr. Tripathi asked him to take him to the house of the Indian Consul General, he took him to the house of the Indonesian Consul General! Anyway he realized his mistake and brought him to my house ten minutes later. The bill came to 1,700 yen, but the taxi driver said he will only take 1000 yen as he had first taken him to the wrong address. So Mr. Tripathi paid him 1,000 Yen. An hour later, the taxi driver returned to my house and asked to see Mr. Tripathi. I thought Mr. Tripathi must have left his umbrella or briefcase in the taxi and the driver has come to return it. Instead the driver took out the 1,000 yen note and asked Mr. Tripathi to take it back. Mr. Tripathi said he would not take it. Then the taxi driver said, "Sir, my conscience has been killing me for accepting money from you. It was my duty to bring you to the right address the very first time and I failed in that duty. For one hour I

have not been able to drive this taxi. If you don't take back the money, I might never drive a taxi again."

Now this kind of taxi driver can only be found in Japan. Because this is a society that still believes in honor and devotion to duty. To these I can add the values of honesty, loyalty, sharing and sacrifice. The whole world saw the best qualities of Japan during the triple crisis of March 2011. Japanese people stayed calm in the face of disaster, making sure to help each other through the earthquake and tsunami that demolished several towns. Despite the harsh conditions, there was no panic or hysteria. No complaining or fighting. No looting or stealing of the sort seen in other countries after a natural disaster.

No wonder, anyone who comes to Japan, falls in love with it. And everyone goes back with a story of everyday generosity and kindness that is typical of the Japanese - the old man who walked a tourist all the way to a station, the innkeeper who chased a group for half an hour to return a torch left by one of the guests, the Obachan on the train who shared her snacks and infectious laugh.

So the rest of the world has much to learn from Japan besides sushi and video games and Pokemon cartoons. Japan shows us how to become modern while maintaining traditional values. Japan shows us how to perform your duty with decency and honor. These enduring values may well be the most valuable way in which Japan can offer leadership to the 21st century world.

Even as we are leaving Japan, we are taking a little bit of Japan with us, in the form of memories and mementoes. My wife has been diligently using her Visa card to buy her favourite Japanese things, from sumi-e ink to wasabi.

We will miss the castles and shrines of Japan, the hanami and the hot springs, the ubiquitous vending machines and the amazing Toto toilets.

But what we will remember most about Japan is the sense of peace.

There is a famous haiku by Fuhaku:

"So very still, even
cherry blossoms are not stirred
by the temple bell."

本人であった。同じフライトで来たインド人は、「日本にはなぜこんなに医者が多いのか」と聞いてきた。

これまでの日本滞在は驚きの連続であったが、次第に慣れ、今では日本は自分の家になった。外交官は遊牧民みたいなものであり、私も間もなく他に転勤する運命だ。

日本はユニークだ。多様性、(歴史の)古さ、複雑さ、更に国民の同質性と独特の文化。200年の鎖国が日本独特のユニークな文化をもたらしたのかもしれない。

社会は文化的価値で決まると考えるが、日本は強い価値観と倫理観のあるまとまりのよい社会だ。

ある日本人学者は、欧米人はデジタルだが日本人はアナログだと喝破した。欧米人は「個」を重視し他人との関係で自分を規定しない。日本人は、アナログ時計の文字盤のように、大きなシステムの中で動き、他の人との関係で自己の価値を見出す。

南アフリカでは、我々の自宅には8つの鍵がかかり、二重のグリルの柵があり、探知機と警報機に囲まれて住んでいた。日本では、家に鍵をかけないで外出する。女性は深夜でも自転車に乗っている。母親は、自動車の鍵もかけずに赤ん坊を残して買い物する(訳者注: 感心したことではない!)。小学生は一人でも登校下校し、信号が緑になるのを待って道を渡る。安全さは至る所にある。

しかし、真に驚くのは、財布を置き忘れても戻ってくることだ。日本の友人が、私はなぜ日本で小説を書かないのかと聞く。私の小説では、現金の入ったブリーフケースやダイヤモンドが他の手に渡ったりすることが筋書きになる。しかし、日本では意図的に財布を落としても、誰かが拾って後を追いかけて渡してくれる。これでは小説にならないではないか! 妻が雲仙で携帯電話を落とした。探したが見つからなかった。2時間後、警官がホテルにやってきて、観光客が交番に届けてくれた携帯電話を渡してくれた。

従って、日本で最も驚くのは日本人そのものである。私が人生で知り合った最もナイスな人々であり、親切さは心に深く刻まれている。道を聞いても、日本人はわざわざ自分のスマートフォンで行き先を探し、目的地まで案内してくれる。

「和」は重要だ。(中略)交通渋滞でもクラクションを鳴らさない。壁に落書きもしない(訳者注: そうでもない者がいる)。道にごみを落とさない。お互いを尊重し、邪魔をしない。電車は列を作って待ち、定時に到着する。約束の時間は守る。他では、「時間厳守」は「時間厳守をしない人間を待つ術」と定義できるが、日本では時間厳守は神聖な約束だ。

人々は環境を大切にする。日本が偉大な理由の一つだ。

日本人は、我々が心地よく過ごせるために、最善の努力をする。カスタマーサービスが秀逸だ。日本はこまやかな心遣いの国だ。刺身の切り方、お茶の出し方、いけばな、包装の仕方(包装そのものが贈り物だ)などなど。

大阪に着いたときに最初にやってきたのが警察官であった。ほとんどの国では、警察官が自宅にくるときは手錠をかけに来る時だ。大阪では、警察官は挨拶代りにと、ブドウを持って来た。

日本人が伝統やセレモニーを重視することも好きだ。季節によって違った伝統やセレモニーがある。花見、海水浴、月見、豆まき。男の子と女の子の祝いの日。老人の日もある。祭りに至っては、札幌の雪まつりから京都の祇園祭、大阪の天神祭りなど挙げればきりが無い。

伝統文化と同様、宗教も生活と一体になっている。インドのように。町のどこでも寺や神社がある。京都では1,600の寺と400の神社があるが、ここは息がつけるオアシスだ。どこの寺社に行っても誰かがお参りしている。忙しい生活を送っているはずだが、精神を養う時間を見出すのだ。日本の美は宗教から由来する。インドでは「真理は美」だが、日本では「美が真理」だ。

日本は自然が美しいが人工美もある。世界最長の明石大橋、最高の電波塔スカイツリー、最速のスパコン「京」などなど。

自然の美は比類がない。光あふれる山々と静かな山里。バラ色に沈む太陽と富士山にたなびく雲、哲学の道の桜並木と海に沈む宮島の鳥居、山に囲まれた露天風呂。日本の美は、人間の丈に合わせている。高松の栗林公園、松江の足立庭園と由志園、竜安寺・大徳寺・天竜寺・南禅寺・東福寺の石庭。

日本の自然美は内的な美に深化し完成する。わび・さび、もののあわれ、「間」等だ。これらが日本の建築、庭園、音楽、いけばな、和歌、書、茶の湯、さらには現代の生活用品や住居に反映している。

日本人は、全てに「美の瞬間」を見出そうとする。ささやかな弁当も一種の芸術だ。バーガー・キングの味のない包装と比べると分かる。日本食は、特に審美的だ。単なる栄養のためではない。食事は、まず「目で食する」ことから始まる。日本食は、ミニマリストの伝統があり、小さなものでも大きな意味がある。

東京は世界で一番レストランが多いが、一人あたりの自動販売機数もそうだ。卵、花、食物、タバコ、酒、アイスクリーム、生鮮野菜、売っているものはきりが無い。なぜなら、技術が生活の不可分の一体となっているからだ。世界最古の弾丸列車、テレビのように二重になる携帯電話、ウォッシュレット。耐震・免震のビル。ロボット式の駐車場。バーやレストランのタッチスクリーンのメニュー。空港でのペーパーレス・チェックイン。ロボット式の電気掃除機。真四角のスイカ！

日本の都市は、最も組織化されており、最もクリーンだ。公共交通も発達している。早くて便利で時間に正確だ。郵便と宅配便は、もうひとつのワンダーだ。

日本では富を誇示せず、人の財産も聞かない。それは日本人の優先事項ではないからだ。インドでは、99のサイクルがあるという。99のものを持つと、3ケタにするためにもう一つを望む。999になると4ケタにするためにもう一つを望む。日本人はこのネズミ・レースから解放されており、違った価値観で生きている。

日本では、名誉、忠誠、分かち合い、犠牲といった観念が生きている。2011年の東日本大震災の際、世界中の人が日本人のこの特性を見た。地震と大津波を前にして沈着

冷静、相互扶助。パニックもヒステリーもなかった。不平不満も戦いもなかった。他では通常みられる盗みもなかった。

日本に来た者はだれもが日本を愛するようになる。当然だ。帰国する者は、日本人のそのような素晴らしさを胸に抱いて帰る。

日本から学ぶものは多い。寿司やビデオゲームだけではない。伝統を大事にしながら近代を生きる。義務を威厳と名誉を持って果たす。日本は 21 世紀のリーダになる資質を示してくれる。

我々が帰国して失うものは多い。しかし中でも心に残るのは、平和(のセンス)だ。この忙しい世の中で完全な静謐を経験することは稀である。我々は、それを日本で経験した。

(訳：日印協会理事長 平林博)

日印交流にこそ質を！ — 山陰インド協会設立を機縁として
Quality; that's exactly what Japan-India relations need

公益財団法人中村元東方研究所 理事
堀内 伸二

はじめに

インド(英領インド)との外交関係を、日本が国家として正式に結んだのは 1894 年、在ボンベイ領事館が開設された時である。インド独立後の日印関係は、1949 年に、「東京でゾウが見たい」という子供達の声を受けたネールー初代インド首相より上野動物園の「インディラ」(令嬢の名)と命名されたインド象が寄贈されたことで注目を浴びた。1952 年には国交が樹立され両国政府間の関係がスタートしたが、今や、毎年交互に両国首脳が相手国を訪問し合うことに象徴される「戦略的グローバル・パートナー」にまで関係が発展した。喜ばしいことである。

とは言え、遺跡に転がる一片のどのかけらをとっても、日本の国宝よりも古いというインドの長い歴史からすれば、人的交流の量的増加は、わずか半世紀ほどの間の出来事に過ぎない。したがって、量の面においてさえまだ緒についたばかりのインドとの交流にあって、その質を論じるなど早すぎると思われる向きもあるかもしれない。「まずは、人的、物的交流の量的増加を！」との主張は、至極当然である。

しかし、歴史的には、インドとの交流は、量より質の方が先んじており、それが、それとして明識されぬまま両国間を結びつける底流となって、日印間の交流を育んできた経緯がある。

この度、執筆のご依頼を受け考えたことは、東洋思想、就中、インド思想をいささか学んできた者として、日印両国の交流について何かしらの発信をすれば、少なくとも文化的視点から、しかもインドという国柄との交流であればこそ可能な「交流の質」という問題に専ら照準するのが相応しい、というものであった。以下、理想論的に響くかもしれないと思いつつ、書生談義をお許し願いたい。

I. 日印交流のはじまり

インドとの人的交流の嚆矢は、歴史書が伝える限り、始めて来日したインド人ボーディセーナ(菩提僊那)である。南インド出身のバラモン僧正である菩提僊那は、736 年に来日、752 年には東大寺の大仏開眼法要に当たり開眼師という重責を任された。病床にあった聖武天皇の絶大なる信任を得ていたからである。

仏教は、紀元前 5 世紀に誕生した歴史的現実性のあるゴータマ・シッダッタが「覚悟(悟りを開く)」という一事においてゴータマ・ブツダとなり、説き出されたも

のである。ブッダは最初から神であったわけではない。人間として生を受け、およそ人間が体験する喜怒哀楽を味わい、しかも人間を超え仏(サンスクリット語のブッダの音写である「仏陀」の省略形)となった。仏教のすべての固有性は、この一点に起因している。その魅力故に6世紀に公伝されて以後、日本文化史は、色濃く仏教色を呈することになる。

日本は、仏教を通じてインドと出会い、インド観を形成したのである。それは、西洋におけるインド観とは全く趣を異にしている。たとえば、東インド会社の支援を受けて学問に没頭することが出来、『般若心経』の英訳を成し遂げた天才的言語学、宗教学者であるマックス・ミュラーでさえ、仏教を「三つの偽りの宗教」にカウントしていた。もっとも、『心経』が何を言っているのかわからない、とミュラーは告白している。やがて今日の伝統的仏教宗派がほぼ出揃う、平安、鎌倉期には、ゴータマ・ブッダへの思慕が極度に昂揚する。実現はしなかったが、インド旅行を志した奄然、栄西、そして東大寺に縁が深い華嚴学を中興した明恵が出たのもこの時期である。実は、院政期から鎌倉初期の間の日本は、国内における地震、気候変動、疫病の流行、また元寇という外圧等、歴史の中でも最も激動した時期の一つである。

ブッダのことばが、それらの問題解決のため真剣に求められたのである。

こういったインド文化の感化があったからこそ、東京国際軍事裁判で、東條英機始め戦犯容疑で巣鴨プリズンに収監された約800人に接した花山信勝東大教授も、講話に日本の皇室と仏法をテーマに選んだのである。

今日となっては、「あばたも靨」の「あばた」や、「銀舍利にうまい鮪をのせ口に運ぶ時の醍醐味」と口にする時の「舍利」が、古代インド語であるサンスクリット語の音写語であることも、また「醍醐味」が仏教由来の言葉であることも忘れ去られているが、角度を変えれば、それほど日本社会にすっかり溶け込んでしまったということである。

これだけを見ても、菩提僊那の来日以後19世紀に至るまで、両国の人的交流が途絶えていながら、インドの質の高い文化は、見事に日本で花開き、知らずに日本の底流をなし、時には表出して、日本とインドを固く結ぶ役割を担ったことが知られよう。

底流は、なかなか気づかれないのが特徴である。「日本では仏教の教える諸行無常・色即是空の存在観が影響しているせいか、西洋哲学で謂う厳しい「実体」(という概念)を逸しかねない」とは、日本を代表する哲学者・廣松渉(中国の南京大学では、創立100周年記念に大学内に廣松渉研究室が設けられた)の言である。それほど深く日本人の心の中に仏教が浸透しているというのである。

II. 社会の質をつくる文化

今日の世界における紛争や衝突の要因を文明(複数形)という視点から分析したハンチントン博士(Samuel Phillips Huntington, 1927年-2008年。アメリカ合衆国の国際政治学者)の有名な所論がある。冷戦後、世界が一元化するかと思われていた最中であって、これからは文明に根ざした世界秩序が生まれ、歴史上初めて国際政治が多極化し、かつ多文明化して、文明の衝突が起こり始めるのである、という論説である。「未来の紛争は経済やイデオロギーではなく、文化的な要因によって誘発されるであろう」と述べたジャック・ドロール元欧州共同体委員長と軌を一にするものである。博士は、文明を規定する客観的要素として、祖先、歴史、価値観、習慣や言語などを列挙したうえで、最も重要な要素は宗教であると結論づけ、文明の違いによる世界地図を描いている。

ところでハンチントン博士は、文明と文化の間に区別をあえてつけない立場をとっているが、ひと頃のドイツでは、両者の間に明確な違いを設けていた。曰く、「文明は機械、技術、物質的要素に関わるものであり、文化は価値観や理想、高度に知的、芸術的、道徳的な社会の質に関わるものである。」確かに、人間の精神能力には、知・情・意の三方面があり、知的には真理を、情的には芸術を、そして意思においては道徳的善を求めるものであり、それが社会の質と深く関わっていることも頷ける。

この点で、ハンチントン博士がヒンドゥー文明に位置づけているインドは、社会の質に関わる文化という面において、「神は虚偽を憎む」(『リグ・ヴェーダ』)とあるように、古来、虚偽に対する真理をこそ最も重要な価値と位置づける伝統がある。国家の紋章には、それが象徴的に示されている。インド国家の紋章は、ゴータマ・ブッダが初めて教えを説いたサールナートにある「ライオンの柱頭」(紀元前3世紀に、インドをほぼ統一したマウリア王朝のアショーカ王が建てたもの)を図案化したものである。そして紋章の下には、デーヴァナーガリー文字で「真実のみが勝利する(satyameva jayate)」(『ムンダカ・ウパニシャッド』)と記されている。

東京裁判で「裁判の方向性が予め決定づけられており、判決ありきの茶番劇である」との主旨で、この裁判そのものを批判し、国際法に照らして被告の全員無罪を主張したパル判事(Radhabinod Pal, 1886年-1967年)曰く。「私が日本に同情ある判決をおこなったと考えられるならば、それはとんでもない誤解である。私は、日本の同情者として判決したのでもなく、西欧を憎んで判決したのでも無い。真実を真実と認め、これに対する私の信ずる正しい法を適用したにすぎない。」パル判事は、どこまでも真理を追究し、それに基づいて無罪を主張したのであり、その事実を日本人は知っている。

真実という価値は今でも生きている事例を、昨年 10 月 10 日、島根県の松江市大根島に開館された中村元記念館の設立プロセスで垣間見た。

中村元博士は、西洋的な学問・技術等が本格的に日本に入ってきた明治以後の日印交流において、特にインド思想研究の分野において、インド人でさえも成し得なかったヴェーダーンタ哲学研究も含め、実に偉大な業績を残した。印度哲学、比較思想、世界思想史の分野における世界的権威である。

生誕 100 年を記念して、今後の日本および世界のために、その業績を顕彰し、研究、普及させるために企画された記念館の設立が、一気に進むことになった一昨年、審議会において設立および運営資金をどうするかが論議された席上でのことである。日本で大いなる成功を収めている、あるインド出身の実業家が、一通り意見が出終わった頃、真顔で毅然として言い切られた一言に一同は驚いた。「今までお聞きしていると、資金をどう集めるか、あれこれ意見が出ておりますが、大丈夫です。真実があるところには、必ずお金は集まります。心配はいりません。」

これがインドという国家の質なのだな、と実感させられた。

Ⅲ. 日印関係の深い絆

この五月、インドのマンモハン・シン首相が来日された折、安倍首相がシン首相に渡された贈答品が平家物語の絵巻であることを知った時、多忙な中、粋な贈り物を準備された関係者に頭が下がった。よく知られた「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす。おごれる人も久しからず云々」に出る「祇園精舎」はインドのウッタール・プラデーシュ州にあり、「諸行無常」は、仏教以外のあらゆる論説との違いを明示する際に掲げられる「三法印」というブッダのことばの中の大切な一句である。

シン首相が帰国された後、ワドワ駐日インド大使は、6 月 12 日から 15 日まで松江においでになられた。実は、今年二回目の訪問である。一国の大使が、同じ場所に、しかも半年の間に二度までおいでになることは異例であろう。その目的の中心は、松江市八束町に設立された中村元記念館訪問にあり、また、それが機縁となって急速に機運が高まった山陰インド協会設立のためである。

大使は、今年 1 月に初めて記念館を訪れた時、中村元博士がラーダークリシュナン大統領より「知識の博士」の称号を受けている姿や、ネールー首相の息女であるインディラ・ガンディー首相と笑顔で握手している写真、またその膨大にして充実した業績等をご覧になって感銘され、「印日関係の中心は、日本のこの素晴らしい地方にある」と述べられた。6 月 14 日の協会設立に際しては、「山陰インド協会は、古代から続く精神的な絆と現代における経済関係という二本の柱に基づいている」とのメッセージも残された。

印象深かったのは、多忙なスケジュールの中、中村元記念館に再び足を運ばれ

た際、記念館のすぐ裏手にある大塚山の公園内に、菩提樹の植樹とともに建立された石碑をご覧になると、時間を超過してゆったりとそこで時間を過ごされたことである。それは、石碑に、中村博士が『スッタニパータ』という仏典から翻訳した「慈しみのことば」(中村博士は、仏教の核心を「慈しみのところ」に見いだされ、生涯、もっとも大切にされた)が、インドのパーリ語原文とともに刻まれているからである。

「一切の生きとし生けるものは、幸福であれ、安穩であれ、安楽であれ。一切の生きとし生けるものは幸であれ。何びとも他人を欺いてはならない。たとどこにあって、他人を軽んじてはならない。互いに他人に苦痛を与えることを望んではならない。この慈しみの心づかいをしっかりとたもて。」

IV. おわりに

安倍総理が、アベノミクスに加え教育の再生を喫緊の課題として掲げたことは、日本の現状を象徴的に表している。日本が忘れてしまった社会の質を回復するためにも、日印交流を通して、その質をしっかりと見つめることは、大変重要な意味を持っている。

相互理解を深めるためには、対話は不可欠である。両首脳間、閣僚間、次官級といった政府間対話のほか、経済界や学界など様々なレベルでの対話の枠組みが進展していることは喜ばしいことであり、今後は地域レベル、市民レベルの交流が進展することが望まれる。しかし、対話を通じて相互理解が深まり共通の認識が形成されていくためには、おそらくその当初から終局に到るまで、「対話の質」が最も重要であろう。確かな質があつてこそ、対話も進み得るし、より普遍的な価値の共有においてこそ、物事に対する認識を共有することもでき、普遍性の故にこそ世界の平和に貢献することにもなろう。

道のりは遠くとも、始め得る人が、地域が、国が、まず始めなければ何も変わらない。

この点で、中村元記念館を契機として設立された「山陰インド協会」は、高い文化の質をしっかりと視野に入れつつ経済交流が行われる可能性を秘めている点で、今後が注目される。中村元博士は東大退官後、私費を投じて東方研究会(現在は、公益財団法人中村元東方研究所)を創立し、その中に「真に教えたい一人と、真に学びたい一人が集まれば成り立つ」現代の寺子屋、東方学院を設立した。山陰インド協会の名誉会長を務められる山陰合同銀行会長・古瀬誠氏は、数多い肩書きの中で、あえて「中村元記念館審議会会長」の肩書きを重視されている。山陰インド協会の会員である地元商工会議所副会頭の中には、この学院で長年インド思想を学ばれている方もおられる。

質の交流は、もうすでに始まっている。

(2013年7月3日)

筆者紹介 堀内 伸二(ほりうち・しんじ)

1989年 東京大学大学院

人文科学研究科インド哲学インド文学博士課程修了、
財団法人東方研究会専任研究員に就任。

現在、公益財団法人中村元東方研究所理事、

日本印度学仏教学会理事、

中村元博士生誕100年記念事業事務局長。

その間、筑波大学、東京農工大学、明治大学などで哲学、宗教学、比較思想等を講ず。

中村元著『広説佛教語大辞典』全4巻(東京書籍、2001年)、同『現代語訳大乘仏典』シリーズ全7巻(東京書籍、2003～2004年)等の編纂を行う。

著書に『般若心経の世界』(学習研究社、2004年)、『白隠禅師生誕320年 白隠・禅と書画』(アサツー・ディ・ケイ、2004年)、『般若心経手帳』(東京書籍、2010年)等多数。

